

## 絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践 ～「みんなでカブを引き抜くぞ！」～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

荒木渉瑠・怡土にこる・江上恵矢・大淵佳那  
菊次史奈・木村紅祢・古賀葵・高巢真希  
田中愛梨・辻楓麗・平井咲瑚・松尾美海

### 1. 実践の概要

題材とした絵本：『おおきなかぶ』

文：A.トルストイ 絵：佐藤忠良  
出版：福音館書店

実践のタイトル：「みんなでかぶを引き抜くぞ！」

実践準備の担当：

総合責任者（古賀葵）

脚本（怡土にこる・大淵佳那・古賀葵）

大道具（荒木渉瑠・江上恵矢・菊次史奈・木村紅祢・高巢真希・田中愛梨・辻楓麗・平井咲瑚・松尾美海）

衣装（菊次史奈）

音楽（菊次史奈・木村紅祢・高巢真希）

実践時の担当：

おじいさん（江上恵矢）

おばあさん（平井咲瑚）

孫（田中愛梨、松尾美海）

犬（菊次史奈）

猫（古賀葵）

ねずみ（辻楓麗）

かぶ（荒木渉留、怡土にこる、大淵佳那）

かぶの妖精（木村紅祢、高巢真希）

### 2. 題材について

「おおきなかぶ」という絵本は読み聞かせでは定番の絵本である。私たちが好きな絵本を題材として選ぶのではなく、子どもたちが知っている絵本の王道と考え、候補として挙げた「はらぺこあおむし」とも比較検討し、劇で表現しやすく、伝わりやすいと考え「おおきなかぶ」を選んだ。

おおきなかぶにはおじいさん、おばあさん、孫、犬、猫、ねずみが搭乗する。絵本では、おじいさんが畑にかぶを育て、育ったかぶを抜こうとするが抜けず、おばあさんと呼ぶ。それでも抜けず、おじいさんとおばあさんが孫を呼ぶ。だが抜けず犬、猫を呼ぶが抜けず、最後にねずみを呼び6人でやっと大きなカブが抜けるというストーリーである。これは、おじいさん1人では抜けなくてもおばあさん、孫、犬、猫、ねずみとみんなで協力したら大きなカブでも抜けるという物語だ。子どもたちの育ちにも協力するという事はとても大切な経験で、園生活においても運動会、発表会など多くの協力する行事がある。だからこそ私たち

は、子どもたちも舞台上に上がって協力し一緒におおきなかぶを抜くということを大事にしたいと考えこの物語に決めた。子どもが知っている「おおきなかぶ」であるからこそ、予測をもって参加しやすかったり期待が持てたりする。加えて私たちの実践では、本来絵本には出てこないかぶの妖精を登場させ、子どもたちにしか見えない設定を行うなどする事で、さらに楽しんでもらえるよう工夫した。

(執筆者：辻楓麗)

### 3.絵本の世界から遊びへの展開

「おおきなかぶ」という絵本は、協力や助け合いの大切さをテーマにした作品であり、子どもたちにとっても非常に魅力的な内容だ。この絵本を題材にした遊びとして、私達は「綱引き」を選択した。この遊びは、物語の中での登場人物たちが協力して大きなかぶを引き抜く場面を体感することができるため、絵本の世界観をリアルに感じることができると思った。綱引きは、チームワークや力を合わせることの重要性を学ぶのに最適な遊びだと思った。僕たちはカブとおじいさんおばあさんなど2つに分かれた。それぞれのチームに対してカブチームは今年こそはおじいさん達に抜かれないぞという目標を持ち、おじいさん達は協力してカブをぬくぞと言う目標を持った。最初は小さいカブをおじいさんやおばあさんなど少ない人数でぬくことが出来ていたが徐々にカブが大きくなりおじいさん達も孫や動物などの手を借りて抜こうとするが抜けずそこで子どもたちの力を借りてぬくことにした子どもたちをステージの上に呼び並んでもらうとみんな綱に興味津々で既に綱を手に取り引っ張る子どももいた。しかしおじいさんがみんなでタイミングを合わせて引くよと声をかけるとみんなタイミングを合わせツナを引いていた。タイミングを合わせることでおおきなかぶを抜くことが出来、みんなで協力し1つのカブをぬくという体験を子どもたちとわかち合うことが出来たと思う。絵本の世界から遊びへの展開は、子どもたちにとって非常に有意義な経験となるのかなと思った。

「おおきなかぶ」を通じて、協力し合うことの楽しさや大切さを実感し、仲間との絆を深めることができたと思う。このような活動を通じて、子どもたちが絵本の内容をより深く理解し、実生活でもその教訓を生かしていけることができるといいなと思う。



(執筆者：荒木涉瑠)

### 4.実践に際して大切にしたこと

「みんなでかぶを引き抜くぞ！」の実践を振り返って、私は子どもたちに「協力する楽しさ」を提供することは最も大切だと感じた。子ども達に協力することの喜びや対話の重要性を体験してもらい、全員で一つの目標を達成するという体験を通じて、子どもたちが主体的に活動に取り組めるように様々な工夫を取り入れた。具体的には、子どもたちが自主的に考え、話し合い、応援、行動できる場を提供した。例えば、最初に「どうしたらカブは育つか」という課題に対して、一方的に説明するのではなく、子どもたちに問いかけ、自分たちで考える時間を設けた。この際、子どもたちが自由に意見を出し合える環境を整え、発言を

尊重する姿勢を大切にしました。また、子どもたちが活動に積極的に参加できるように、人数や力加減のバランスを十分に配慮しながら自然に役割分担が進むよう工夫しました。さらに、子どもたちが達成感を味わえるよう、活動の進行にはメリハリをつけ、かぶを引き抜く過程で徐々に期待感を高め、成功の瞬間には全員で喜びを共有できる雰囲気意識しました。安全面にも配慮し、かぶを引き抜く際の力加減や立ち位置を学生同士で確認し、子どもたちにケガのないように事前に注意を促した。それと同時に、無理のない範囲で体を動かす楽しさを感じてもらえるよう、十分なスペースを確保し、伸び伸びと活動できる環境を整えた。このような工夫や配慮を通じて、私は子どもたちに協力する楽しさや喜びを体験してもらうだけでなく、他者と意見を交わしながら目標に向かう過程の大切さを伝えることができたと感じた。このような活動は今後の保育活動にも積極的に取り入れていきたいと思う。



(執筆：松尾美海)

## 5.実践内容について

### (1) 全体の構成

ピアノが鳴りだし幕が開く。ピアノが終わり、おじいさんが腕を広げながら「ああ～天気の良い朝だな」と言い舞台上に出てくる。畑を指さし、「この畑にかぶの種をまこうと思っているんだけど、あ！種がない！」と驚いた様子で舞台裏に種を取りに行く。

真っ暗になり、ウィンドチャイムが鳴る。スキップをしながらかぶの妖精2人が舞台上にでてきて歩き回り中心にとまる。照明がつき、「こんにちは～！私たちはかぶの妖精だよ～！」とポーズを決める。妖精は「今からおじいさんがかぶを育てようとしているんだけど、みんなかぶって知ってる？」と子どもたちに聞く。子どもたちは「知ってる～」と反応し、かぶの妖精は頷く。後ろのスクリーンにかぶのイラストが表示され、そこを指差して「こんな形のお野菜なんだけどみんな知ってた～??」と子どもたちに聞き、子どもたちが反応する。かぶの妖精が「このかぶっていうお野菜をおじいさんが育てようとしているんだけど、どうやったら甘くて大きなかぶに育つか？知ってるお友達いる？」と子どもたちに問いかける。舞台下に降りて子どもたちの意見を聞きに行く。舞台上に戻り、妖精A「私3つ教えてもらった！」妖精B「なにになに～！」妖精A「1つ目は水をあげること！」妖精Bはジョウロをもって畑に水をかける。妖精A「2つ目は太陽の光を当てること！」妖精Bは畑に向かって手をピカピカする。妖精A「3つ目は涼しいところで育てること！」妖精B畑に向かって手で仰ぐ。妖精B「みんな教えてくれてありがとう！僕たちのことはおじいさんには見え

ないから、おじいさんが困っていたら、みんながこの3つを教えてあげてね！」妖精A  
「あ！おじいさんきたきた！！」と言い引っこむ。

同時に、おじいさんが、かぶの種を持って、「さぁみんなごめんね、種持ってきたよ！」と種をみんなに見せる。「今からこのかぶの種を畑に巻くね」と言い、畑を耕し、種をまく。「おじいさん育て方がわからないの。だから、教えてくれる？」子どもたちが教えてくれる。「1つ目は水をやるだったよね？」とジョウロをもって畑に水やりをやると同時にピアノがなる。すると、かぶの頭が少し出る。「2つ目は太陽の光を当てる！」ピアノがなり、太陽が上から見えてくる。「3つ目は涼しい所で育てるだったね」「おじいさん今からこの大きなうちで涼しい風を送ります！」とピアノがなり、畑に向かってうちで仰ぐ。すると、かぶの頭がでる。おじいさんは扇ぎ続け、かぶの妖精が畑の後ろに出てきて、「ねえみんな、おじいさんのかぶも段々大きくなってきたね！よーしここでもっと甘くて大きなかぶにみんなでしちゃおうよ！」「みんなで甘い甘いかぶになれ！大きな大きなかぶになれ！って言うてみよう！」「せーの！」全員で、「甘い甘いかぶになれ、大きな大きなかぶになれ！」と言う。すると、かぶ小の頭が完全に出る。かぶの頭が出てきて、おじいさんとかぶの妖精はビックリしている。

おじいさんが「みんな！かぶが頭を出したよ！よーし！今からおじいさんが頑張ってるこのかぶを抜くから、みんなおじいさんがうんとこしょ、どっこいしょ、で抜くからみんなも力貸してくれる？」と問いかける。「いいよー！」と反応してくれる。「じゃあ抜くよー！せーの！」全員で「うんとこしょ、どっこいしょ×2」すると、かぶが抜け、おじいさんとかぶの妖精は驚いて倒れる。かぶ小が「抜かれちゃったけどこの畑にはまだまだ大きいかぶが残っているかもね〜！」と言い、バイバイしながら舞台袖にはける。おじいさんとかぶの妖精がかぶを探し回り、妖精A「えー！まだ畑にはまだ大きなかぶが残ってるってー？！みんなで甘い甘いかぶになれ！大きな大きなかぶになれ！って言うてみよう！せーの！」全員で「甘い甘いかぶになれ！大きな大きなかぶになれ！」、するとかぶ中が頭をだす。おじいさん「また畑からかぶがでてきたよ！おじいさんこのかぶも抜きたいと思います。みんなもう1回力貸してくれる？せーの」全員で「うんとこしょどっこいしょ×2」だけど、かぶは抜けなかった。おじいさん「おじいさん1人で抜けないみたい。1人で抜けないから、おばあさんと呼んでもいいかな？」と言い、全員でおばあさんと呼ぶ。舞台袖から「はーい！大きな声で呼ばれたけどどうしたの？」と言いながら舞台上に出てくる。おじいさん「このかぶを抜きたいんじゃないよ。だからちょっと手伝ってくれないかい？」おばあさん「仕方ない。私も一緒に抜くの手伝ってあげましょう！」おじいさん「みんなもう一度力貸してね」と言い、子どもたちが「いいよー！」と言う。「せーの！」全員で「うんとこしょどっこいしょ×2」するとかぶが抜ける。かぶ中「あちゃー！まだ抜かれたくなかったのに！せっかくなら美味しく食べてよね！ばいばい！」と言い、舞台袖にはける。おじいさんとおばあさんは喜んでいる。畑からかぶの頭が少し見えていて、子どもたちが「まだいるよ！」と言う。おじいさん「この畑には大きなかぶがあるかもしれないから、ちょっと探してみよう！」ピアノに合わせて、おじいさんとおばあさんが舞台上を歩き回って探している間に、かぶ大が顔を出す。ピアノが止まり、かぶにおじいさんおばあさんが気づき、かぶが驚いている。おじいさん「こんな所に大きなかぶが生えているよ！2人で抜いてみるからみんな力貸してね！」「せーの！」全員「うんとこしょどっこいしょ×2」けどかぶは抜けない。おじいさん「2人では抜けないから、孫たちを呼んできてもいいかな？ちょっと孫たち呼んでくるねー！」と2人で舞台袖にはける。照明が暗くなり、スクリーンにかぶの土の中の動画が流れる。照明が明るくなり、おじいさんたちが戻ってくる。孫1「かぶってどこにあるのー？」畑のところに来て、孫1「あ！こんなでっかいかぶ抜こうとしてんのー？」孫2「こんな大きいかぶ抜けるわけないない！」孫1「勘弁して！」孫2「もう帰ろっか！」と孫2人で帰ろうとする。おじいさん「ちょっとまって！」おばあさん「そんな怒らないでちょっとがんばってみましょう！」孫「いいよー！」おじいさん「よーし今から4人で抜くからみんなも応援してね！」「せーの！」全員「うんとこしょどっこいしょ×2」けどか

ぶは抜けない。4人「抜けないよ～」舞台袖から動物の鳴き声がある。孫2「あれ？動物の鳴き声が聞こえる。みんなよく聞いてみて！」犬の鳴き声。孫1「この動物なんの動物かわかるかな？」子どもたちが答える。4人「おいで～！」犬が登場する。ねこ、ねずみの鳴き声。1人ずつ登場する。おじいさん「みんなも手伝ってくれるのー？」動物「いいよー！」おじいさん「みんなで協力して大きなかぶを抜くぞー！」7人「おー！！」おじいさん「みんなも応援してね！」「せーの！」全員「うんとこしょどっこいしょ×2」だけど、かぶは抜けない。7人は悔しがり、悩んでいる。おばあさん「みてみてー！ここにいるたくさんのお友達に手伝ってもらおうということはどうかな？」6人「いいねー！」おばあさん「よし！手伝ってくれるお友達探しに行くぞー！」ピアノがなり、7人は客席へ降り子どもたちを舞台上に連れてくる。7人は子どもの横や後ろに立ち安全を見守る。おじいさん「みんな！おじいさんがうんとこしょどっこいしょって言ったらそれを真似して、一緒に聞いてね。客席にいるみんなも応援してね！」「よーしみんな！大きなかぶを抜くぞー！」全員「おー！！」「せーの！うんとこしょどっこいしょ×3」かぶ大が抜ける。みんな喜んでいる。おばあさん「前に出て手伝ってくれたお友達に拍手！」子どもたちを客席に連れていく。かぶと妖精は舞台上の中心に座る。全員が中心に集まる。おじいさん「座って応援してくれたお友達もみんなありがとう！」全員「ありがとう！」おばあさん「みんなが手伝ってくれたおかげでこんなに大きなかぶが抜けたよ」「今日お家に帰ってかぶパーティでもどうかな？」全員「いいねー！」「見に来てくれたみんなも寒い冬はかぶを食べて元気いっぱいになってね～！」おじいさん「それじゃあ！」全員「ばいばーい！」幕が閉まる。

(執筆者：大淵佳那)

## (2) 子どもたちとの対話について

まず最初に、子どもたちにカブの妖精が「みんなかぶって知ってる？」と聞き、子どもたちにかぶの存在を知らせ、今からかぶが出てくるお話ということを知ってもらおう。そして、「じゃあ、どうやったらかぶが大きく育つと思う？」と聞いて、子どもたちに答えてもらおう。かぶの妖精が子どもたちの所に行き子どもたちの意見を聞く。そして、子どもたちに「お爺さんにみんなが教えてあげてね」と言う。みんなが教えてあげてねということで子どもたちは答えを知っているというワクワク感や子どもたちの自信に繋げる。頼られているという感覚を味わう。お爺さんが実際に「どうやったら大きく育つかない」と子どもたちに聞く。子どもは大きな声で自信を持ってお爺さんに教える。お爺さんが子どもたちの教えてくれたことを実際にカブにするとカブは少しずつ大きくなり、それを見た子どもたちは凄くワクワクし嬉しい気持ちになれる。次に子どもたちに一緒に「大きなおおきなカブになれ甘い甘いカブになれ」、「うんとこしょどっこいしょ」と言ってくれるように促し、子どもたちが言うとカブが大きくなり、抜ける様子を見せる。

子どもたちはそれを見てお友達などと協力して大きな声でカブが抜ける体験をすることが出来、みんなと協力する楽しさを感じる。そして、お爺さん、お婆さん、孫、犬、猫、ネズミが出てきておおきなカブを抜くが抜けないと言い、子どもたちに手伝ってもらおうように言う。ステージで何人かの子どもたちに手伝って



もらい、席に座っている子どもたちには大きな声で「うんとこしょどっこいしょ」と言ってもらおう。ステージに立っているお友達に「頑張れ」と声掛けをすることや、「出たかった」と悔しがる感情を体験する。ステージにたった子どもは協力して抜けたという喜びを体験出来るようにした。子どもたちに「ステージにたってくれたお友達、席に座って大きな声で応援してくれたお友達ありがとう」と声掛けをする。みんなと協力すること、カブが抜けた喜び、ステージに立ちたかった悔しさなど色々な感情を体験できるようにした。

(執筆者：木村紅祢)

### (3) 演出の工夫

まず、最初におじいさんの登場で、おじいさんは腰を曲げて登場したり、ひげをつけたり、大きな声で子どもたちに声掛けをすることで子どもたちに元気なおじいさんとわかるよう表現した。原作ではロシアの民族衣装だったが、子どもたちが分かりやすいように現代のイメージしやすいような身近な衣装を用意した。そしておばあちゃんは、おばあちゃんのようなカツラを被り、おばあちゃんに寄せて登場し、おじいさんと協力しながらすることで子どもたちに優しく元気なおばあちゃんとわかるように表現した。孫は、帽子を被り、鞆を持ち、大きな声で登場することで、若くて元気な孫たちとわかるよう表現した。犬、猫、ネズミは、それぞれの色や耳、尻尾などを自分たちで作り、犬、猫、ネズミの鳴き声を真似し、子どもたちにすぐわかるよう表現した。カブに水をあげる時や、太陽を照らす時、風をあげる時、登場シーンなどにピアノやウインドチャイムなどを使って音をつけて子どもたちのワクワク感を引き出した。カブが抜けるシーンでは、本当に土から抜けたように見せるために、奈落を使いおじいさんたちが力強く抜くような演出をした。妖精が登場するシーンでは、羽やスカートを着たり、最初暗くして羽根に光をつけ、まるで飛んでいるように表現した。カブは、白い洋服を着て頭にカブの葉っぱを自分たちで作って、カブとわかるように表現した。子どもたちがカブを抜くときに本当に力強いカブがあるとわかるように奈落の下でみんなで引っ張ってすぐに抜けないように表現した。子どもたちがわかりやすいように様々な工夫をして表現をすることを心掛けた。



(執筆者：田中愛梨)

## (5) 言葉とセリフ

言葉とセリフについて、声掛けには「～かな?、どうしたらいいんだろう～」などと、問いかけるような声掛けを多く取り入れ、子どもたちは自分の発言が実際に聞いてもらえるという楽しみや、見ているだけではなく一緒に劇を楽しむこ



とが出来たのではないかと思う。また、カブを子どもたちと抜く際には「誰か手伝ってくれるお友達いる～?」と呼びかける事で、子ども達のやりたいという気持ちに対応できたと思う。また、劇中のセリフはトゲトゲしている言葉を使わずに優しい言葉を選び、子どもたちに聞こえやすい大きさやスピードを心掛けた。セリフを考える際には練習の段階では子どもに問いかけるセリフでは子どもからどんな言葉が返ってくるのかを考えながらするのにグループみんな苦戦していたが、九州大谷幼稚園でのプレ実践で実際に子どもに問いかけてみてどのような返しが来るのかをある程度把握出来た為、プレはとてとても有意義な時間になった。本番前には2番目だったので1番目のグループの子どもの反応を見て思っていたよりも答えてくれていたので自信を持ってセリフや問いかけることが出来ていた。セリフや言葉の全体を通して全体的にみんなハキハキと恥ずかしがることなく言えていたのでとても良かったと思う。

(執筆：平井咲瑚)

## (6) 動きと身体表現

子どもたちが物語に主体的に関わることを目指し、大小異なる「かぶ」を用意して工夫した。小さいかぶ、中くらいのかぶ、大きなかぶを順に抜いていく展開にすることで、物語の緊張感を段階的に高め、子どもたちが「次はどうなるのだろう?」と期待を膨らませられるよう演出を行った。特に、最も大きなかぶを抜く場面では観客席の子どもたちにも参加してもらい、一体感を作り出した。この際、役者が「みんなも一緒に手伝って!」と呼びかけ、子どもたちが手を前に伸ばして「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声に合わせて体を大きく動かせるよう促しました。この動きが劇場全体に活気を与え、観客と舞台の境界をなくし、一緒にかぶを抜く達成感を共有する体験へとつなげた。また、かぶのサイズごとに役者たちの動きや表現を工夫しました。小さいかぶでは軽く引っ張るだけで抜けるため、役者が「おっと、簡単だったね!」と笑顔で伝え、子どもたちが安心して参加できる雰囲気を作りました。一方、大きなかぶでは、役者が力を込めて引っ張りながら、苦しそうな表情や声を大きさに表現した。これにより、子どもたちが「もっと力を入れなきゃ!」と感じ、体全体を使って協力する動きに繋がった。こうした工夫により、子どもたちは物語の一部として積極的に参加し、動きや身体表現を通じて演劇の楽しさを体験することができた。

(執筆：高巢真希)

## (7) 音と音楽

大きなカブの音、音楽を振り返ってみて、まず最初に、既成の音源を使わずどのように音を使うかについての戸惑いがあった。ピアノや楽器をどう使うか考える過程では「音無しで良いのでは」と考えることもあった。しかし、場面によって音は少しでも絶対に必要だと気づき、みんなで考えた。その結果、主にピアノを使う事となったが、演奏者が決まらない。結局は劇自体の出番が少なかった私がピアノを弾くことにした。もちろん難しいものは弾けないので、先生や友達に簡単な演奏を教えてもらい、本番ではピアノを弾いた。劇初めの幕が開けるシーンでは静かな演出で、おじいちゃんおばあちゃんが畑を見渡すシーンでは、探してるような雰囲気などでたくさんのかぶのことを考え、教えてもらい、劇の中にピアノを入れてよかったなと実感した。そして始めに妖精が出てくるシーンでは、ウィンドチャイムを使い、妖精らしい、妖精が飛び回っているような音を奏でることができた。劇にピアノや音を取り入れるだけでその時の雰囲気がガラッと変わることを実感することができた。また、「大きなカブ」をテーマに音を取り入れる方法を考えた時、♪うんとこしょ、どっこいしょ♪の部分全員で歌うことが1番に思いついた。カブを引っ張るシーンでみんなで大きな音を出して「引っ張る力」を表現することができたり、動物の鳴き声などを真似して表現したりと「大きなカブ」の世界をさらに楽しく演出できたのではないかと感じた。

(執筆：菊次史奈)



## (8) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

プレ幼教こども劇場を実践した際、学生が「カブ」という野菜を提示して子どもたちに話すと、いまから劇が始まるんだと子どもたちは分かり、静かに話をしている学生の方を見る様子が見られた。

カブはどんな料理に使う野菜なのかななどを子どもたちに問いかけると「切るー！」や「焼くー！」と調理方法を答えた。おじいさんが出てきて、子どもたちに問いかけるように「たねを取ってくるねー」などと言うと「わかったー」とおじいさんに答えるように発言している子どもたちが複数いた。カブの妖精が出てきた時、キラキラしている羽や飛び回っているようせいたちに興奮して「キヤー」というような叫び声が出た。カブの妖精が、「カブって野菜知ってる？」「どうやったら大きくなるかな？」などの質問に対し、「はいー！」と手を挙げて答えようとする子どもたちがたくさんいた。カブの妖精はおじいさんたちには見えないという設定を守り、おじいさんが種をまいている時、「水をまくー」など大きくなる方法を教えていた。カブの葉っぱが見えると、「わあ！でてきた！」と反応していた。カブと綱引きするときに「うんとこしょどっこいしょ」という掛け声を大きな声で一緒に言っていた。学生が子どもたちの方にいき、1人ずつ手伝ってくれる子を連れていく時、みんなが手を挙げて「わたしがいきたい！」というようなアピールをたくさんしていた。子どもたちの前にでると友達を応援するように「頑張れー！」と応援する掛け声をする子たちがいた。最後にカブが抜けると、「いえーい！」と拍手やハイタッチしながら喜んでいる姿があった。

(執筆：怡土にこる)

## (9) 取り組む過程での改善と工夫

今回、劇の題材として絵本「おおきなカブ」を選び、脚本を考えた。初めに考えた脚本は、絵本の内容をもとに子ども達が物語に参加出来る部分を考え、対話や身体表現に重点を置いたものだった。練習やリハーサルの中で通してみると、改善点や新たな考えが多く生まれた為、その都度脚本を訂正・改善し、より良いものになるようにみんなでアイデアを出し合った。以下に、当初の計画から見直した点や工夫を加えた点を具体的に記述していく。

【ナレーターを無くし、カブの妖精として舞台にでて、子どもたちと対話をする】

初めはナレーターと配役し、舞台裏から声だけでの予定だったが変更し、カブの妖精として舞台に出ることにした。掛け声の促しや子どもたちとの対話を実際に舞台に出て行うことで、物語の雰囲気壊さずに、独自性と面白さ、そして子どもたちが発言しやすい環境作りを心がけた。

【舞台上に奈落から出てこれるようにして、カブが頭を出す様子を分かりやすく表現した。】

舞台に穴を設けて、客席から見ると何も無いところからカブが出てくるという目を引くような演出を取り入れた。また、種をまいて水をあげたり太陽を当てたり、涼しいところにしていく中で、少しずつカブが頭を出すことで実際に育てている感覚になるような工夫を取り入れた。



【カブを抜く時に綱を用意した】

練習ではカブの手を握って抜いていたが、初めから綱を引くことに統一した。舞台終盤には子どもを舞台にあげて一緒に抜くため、「抜く時は綱を引く」という印象付けをした。

【ピアノやウインドチャイムを使い、様々な音を表現し 明るい劇にした】

おじいさんの登場前の朝を表現する音や、妖精のキラキラを表現する音など劇中に様々な音を入れ 明るく楽しくなるような工夫を取り入れた。

【カブ同士の話し合いをする場面では、事前にとった映像を後方スクリーンにうつした。】

まるで、本当に今、土の中でカブたちが話しているかのように見せるために、頭を出していたカブ役も隠れて、映像に集中できる環境をつくった。おじいさんたちが出てきた時、1人の子どもが「さっきカブからお電話きてたよ～」とおじいさんに伝えていて、自分も考えていなかった捉え方に驚き、想像力の豊かさを実感した。

【動物たちはすぐ出るのではなく、最初に姿を見せず鳴き声だけ出し、子どもたちに何の動物か想像してもらい答えてもらった。】

静かに聞く時間と発言等をして自分を表現する時間をきちんと分け、メリハリのある劇を目指した。

(執筆者：古賀葵)

## (10) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

実践を振り返ると、結果から見て非常に良いものであった。時間もゲネプロの時よりも詰めてほぼピッタリに終わらせることが出来た。自分たちの劇の流れと、実際に子どもたちとの掛け合い、アドリブなどを含め、ちょうど良い時間で劇を作り上げることができた。子どもたちの反応、リアクション、応答などを見て、子どもたちはほんとに素直に応答していて、とにかく元気だった！元気に「太陽！太陽！水水！」など、元気におじいさんに伝わるように全力で答えていた。子どものペースを止めることなく全て受けいれてから進むように進行していた役のみんな。その空間すらも楽しくて、何回聞いてもその時間は子どもからしたら、「僕たち知ってるんだよ！」と訴え自分たちがそれを受け入れ、進めていったことが上手くいったことかなと思った。登場人物一人一人出てくると子どもたちのリアクションは良かった！笑いが起きてたし、妖精の時が1番リアクションが良かったと感じた。自分たちも子どもだけではなく学生が見て楽しめるようにボケの要素を入れたり工夫もした。ステージの上では座っている一人一人の顔が見えるので自分たちも見ていて楽しかったし、幸せな気持ちになれた。唯一の反省は子どもたちをステージにあげた時に、保育者たちが子どもたちをどんどんステージにあげてきた。自分としてはそれも良かったが歯止めが効かなかったのでそこをあらかじめ伝えておくべきだったなと思った。子どもたちは綱引きを全力でしていた。

全力で綱を引く子どもたちの表情は非常にかっこよく鮮明に覚えている。本当に子どもたちの笑顔を見れたことが1番の収穫になった。

(執筆者：江上恵矢)



## 5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【平井咲瑚】

カブを引き抜くという目的がとても分かりやすかったなと思った。どうしたら美味しいカブができるかなと子どもたちに聞くと様々な意見がでていて、それをしっかり聞く時間があり良かったと思った。また、お爺さんには秘密だよと妖精が言うシーンは、子どもたちも秘密ということにワクワクしているように感じた。そして掛け声を作ることによって子どもたちも気持ちが上がっていたのしそりにしていると感じた。実際にカブを抜く時に、何人かの子どもを呼んでいて、ステージに上がっている子どもはとてもワクワクしている様子だった。また、その他の子どもも一緒に掛け声をかけていて一体感がありよかったと思う。個人的には元々孫の役の予定で急遽変更でおばあちゃんをしたけど、幼稚園実習で年寄りの役をした経験が今になって役に立って結構元気なおばあちゃんになったけど子どもたちはとても喜んでくれていて良かったなと思う。今回最初はこのグループで上手くいくのかなと思ったけど本番が近づくにつれてみんなやる気になっていってしっかり仕上げた本番では大成功だった。終わってみて、今回の幼教こども劇場はやって良かったなと思う。将来どこかで役に立つといいなと思う。

【江上恵矢】

幼教こども劇場を通しての最大の学びは、2年間で学んだ知恵と知識と経験をグループ全体で出し合い、何度も試行錯誤して作り上げ子どもたちと一緒に1つの物語を作り上げ自分たちそして、それを見た一人一人が物語を知り、笑顔になれたことが1番の学びだと思った。

振り返ってみて、初め物語を決める段階でみんな何となくで大きなカブに決まって、本番で時間があるから特に何も焦ることなく、何も動かなかった。本番1か月前までは特に何もすることなく時間だけが過ぎていった。自分は道具担だったので最初の方は自分も特に何もしてなかった。台本を作る2人はそんな中でもずっと考えていた。今思うとあの2人に、構成を任せてほんとに良かったなと思う。いよいよ時間が無くなっていった時に少しずつ動いていった。ステージの上の装飾をどうするのか、何を作る必要な物は何か、手作りで作るものはみんな協力して作り、特に縫い物は、時間がかかった。家に持ち帰ってしてくれた仲間には感謝している。みんなで読み合い細かいところを意見を出し合って完成にこぎつけた。役者同士でのコミュニケーションは練習を繰り返した上で細かく行った。

そのおかげで笑いと学びの両方を楽しむことが出来たなと思う。見ていた子どもたちは笑顔になり、学生も笑っていた。やっている自分たちも「楽しかった！」と口を揃えて、ほんとにやって良かったよねと言っていた。これらからの保育士生活の第1歩になったと思う。グループのみんなにありがとうと伝えたい。ほんとに楽しかった！ありがとう。

【木村紅柁】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、どう子どもたちと一緒に楽しめるかである。実践の際の子どもの反応に驚いた。かぶチームは子どもたちをステージに上げたり、質問をしたり、教えてくれる？と聞いたりして子どもたちを巻き込んだ。最初はステージに上げるかを悩んだりしたがあげて正解だったなと思う。質問をしたりすることで子どもたちの興味を引き立てワクワク感などを味わえるなと思った。そして、「お爺さんにみんなが教えてあげてね」と声掛けをすることでおじいさんが困っている時に子どもたちが教えてあげていてそれは「困った人に教えてあげるんだよ」ということを体験することが出来たのかなと思う。ステージにあげた時に何人かしかあげれず泣いていたりした子どももいたけどそれもまたいい経験なのかなと思う。「上がりたかった」という気持ちを体験して、でも譲るって気持ちも体験できるなと思った。みんなで大きな声で「うんとこしょどっこいしょ」などの声

掛けをすることで一体感がうまれたなとおもった。子どもたちも大きな声を出してくれていてとても嬉しかった。幼教こども劇場を通して様々なことを学べたし、今後に活かしていけることが増えたなと思った。

#### 【大淵佳那】

今回の幼教劇場を通しての最大の学びは、決まっているお話をどのように工夫して子どもたちに楽しんでもらえるかだと思う。準備の過程では、まず題材を選んでその物語の中でどのように子どもたちと関わっていくかを考えた。グループの中で色々な案がでており、それをする事で子どもが楽しめるのか、安全に取り組みめるのかなどをグループ内で話し合った。ひとつに絞っても本当にそれで大丈夫なのか、楽しんでもらえるのかなどじっくり考えた。また、ここでは子どもに声掛けを手伝ってもらおう、ここでは真似をしてもらおう、など色々な場面で色々な関わりができるように物語を作った。時間も制限される中、ここまでしたら間に合わないんじゃないか、でもここは入れた方がいいよねなどグループ内で話し合いをした。実践の際の子どもの反応は、とてもよかったと思う。ここまで反応してくれたり、一緒に手伝ってくれたり、いい感じに終わったのではないかなと思う。子どもたちも楽しんでいたし、学生や保護者も、そしてやっている私たちが一番楽しかったのではないかなと思う。このような経験は滅多にないため、経験できてよかった。グループ内の人達とも協力でき、より絆が深まったのではないかなと思う。

#### 【辻楓麗】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、2年間の授業の中で学んだことや実習を通じての子どもたちの反応や関わり方を考察し、みんな一人一人役割の責任を持ち、子どもたちの笑顔を見れるために考えた事が一番の学びだったと思う。準備の段階で、最初は頭の中で想像して物事を進めていた。だが、実際に講堂に行き、スタッフさんと話す中で、想像していた道具は大きく制作をしないとけなくて最初に考えていたことに修正がいっぱいで頭がパンクしそうだった。本番までまだ1ヶ月以上あると油断していたこともあり最初は、とりあえず必要なものだけ考える程度だった。本番一週間前になり、リハーサルを通した。セリフの付け加えや道具も作るものや用意するものがでてきた。本番前日、全然前日感がなくて学生に見てもらい劇を通した。初めて人をステージに連れてきてからの感覚でそこでも改善点がでた。今までの改善点を治し、本番が楽しみになってきていた。本番当日、たくさん子どもたちとみんなの緊張感があってとても緊張した。けど、みんなの劇がいつも通りで変な緊張もなくなっていた。今までで一番いい劇だったし、いっぱい考えたこともあったけど楽しかった！

#### 【古賀葵】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、「自分を表現する大切さ」だったと思う。今回の劇では、「おおきなかぶ」を題材に脚本を考え、子どもたちとの対話に重点を置き、作り上げた。特に、子どもたちが実際に舞台上がり、一緒に「カブを抜く」場面では、舞台上がって学生と一緒にカブを抜く子どもや、座って応援する子どもなど、一人ひとりが自分の役割を楽しみながら果たしている様子が印象的だった。子どもたちの自由な発想や表現力に触れることで、自分自身ももっと積極的に思いを伝えたり、感情を表現したりすることの大切さを実感した。また、脚本作りや練習、幼稚園で行ったプレでの子どもたちとの対話を通して、新しいアイデアが生まれたり、予想もしなかった工夫が加わったりする瞬間が多くあった。また、私たち学生同士でも、練習の際など、自分の考えや思いを伝えることなど、脚本を作っていく中で自分を表現する機会が多くあった。劇当日は、終始子どもたちが集中して見てくれて、さらにキラキラとした笑顔だった為感動した。自分を表現する楽しさや達成感は、子どもたちだけでなく、私自身にとっても大きな喜びとなった。この経験を通じて、表現することがコミュニケーションの第一歩であり、より良い関係を築く鍵

だということを改めて実感した。これからも自分の思いをしっかりと伝え、他者との関係を深めていけるよう努力していきたい。

#### 【松尾美海】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、子どもたちが「協力する楽しさ」や「目標を達成する喜び」を体験するための環境づくりが、保育者にとって非常に重要であるということだ。準備の過程では、単に活動を進めるだけでなく、子どもたちが主体的に考え、行動できるような工夫をどのように取り入れるかを試行錯誤した。特に、物語を「大きなカブ」に決めてから、そこにどのような工夫を加えれば子どもたちが楽しめるかを何度も試行錯誤した。振り返ってみると、最初の段階では計画が具体的に進まず、どこから手を付ければよいのか戸惑う場面もあったが本番が近づくにつれて役割分担を明確にし、それぞれが自分の役割を果たす中で徐々にグループ全体がまとまっていく感覚を味わうことができた。実際に子どもたちの前で劇を披露した際、笑顔や歓声が上がり、カブを引き抜く瞬間には、子どもたち・学生全員で喜びを共有し、活動そのものが「楽しかった！」と感ずることができた。また、活動の進行には、子どもたちの安全を確保するための配慮も欠かせなかった。特に、かぶを引き抜く際の力加減や立ち位置の確認、自由に動ける十分なスペースの確保など、事前準備の大切さを改めて学んだ。この取り組みを通じて、私は子どもたちに「協力することの楽しさ」を伝えるだけでなく、保育者としての責任感や実践力を身につける良い機会となった。今後の保育活動では、子どもたちが主体的に動ける環境を意識しながら、より多くの笑顔と学びを提供できるよう努力していきたいと思う。

#### 【菊次史奈】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、「大きなカブ」は、家族や動物たちが協力して大きなカブを引っこ抜くというシンプルな話ですが、その繰り返しが子どもたちにとって非常に分かりやすく、安心感を与えることができた。動作を真似したり、大きな声で「うんとこしょ、どっこいしょ！」と声を合わせる場面では、会場全体が盛り上がった。役割分担の楽しさで、役ごとに簡単な台詞や動きがあるため、子どもたちはそれぞれの役を見るのをものすごく楽しんでいて、カブを抜くために全員が協力し合うというテーマは、自然と「協力の大切さ」を子どもたちに伝えることができた。これにより、劇後も「みんなでやるとできるね！」といったポジティブな思考になるのではないかなと思った。子どもたちが一人ではできないことも、仲間と力を合わせることで達成できるということを実感することができた。そして一人一人に役割が与えられることで、自分の役割に責任を持ち、その中で他者と協力するという経験をすることができ

た。「大きなカブ」の劇は、シンプルながらも子どもたちの主体的な参加を促し、協力や役割分担の重要性を自然に学べる素晴らしいものになった。楽しかった！

#### 【荒木涉瑠】

幼教こども劇場を通して、「おおきなかぶ」という絵本は昔から知っていたが今回劇を行う中で更に理解が深まりこの絵本を読むことでどういったメッセージを作者が込めていたのかというのを理解出来た。ひとつの目標に対してみんなで協力をして成し遂げる事が出来た時の喜びというのを感ずった。準備では、題材である「おおきなかぶ」がすぐ決まり約2ヶ月という時間がありました。週に2回の授業があり何とかなるだろうという気持ちが大きく特に進めることなく1ヶ月が過ぎた。そこでどこまで進んだかを確認すると今の状態で本当に本番を迎えて良いのか？と焦りが出てきた。台本の人たちはずっと中身を考えてくれていたが小道具などが全然準備できておらずみんな焦りながらも着実に準備を進めた。本番では、子どもたちの反応や自分たちの手応えなどを考えても大成功であったと思う。ステージに上がってくれた子どもたちの表情や楽しそうな声を聞いた時このようにステージに子どもを上げて

良かったと思う反面、上がれなかった子どもの様子を見てまだまだ改善する必要があるなとも思った。大谷こども劇場に行って大変なことも沢山あったが最後にメンバー全員が楽しかったと言って終わって良かったと思う。

#### 【怡土にこる】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、協力することの大切さや子どもたちとの関わり方や反応を考え、実行することの難しさだと思う。子どもたちがどのようにすると笑顔になってくれるか、楽しんでもくれるかをたくさん考えた。最初の段階では計画や準備がうまくいかず、ぐたぐただったが、役割分担を行い、一人ひとりがしっかりと自分の役割を果たし、協力することでグループがまとまり、みんなでひとつの事を成し遂げることができた。あっとゆう間に準備期間が終わり、プレ当日ステージにあがったとき、子どもたちの楽しそうな表情や声がたくさん見れた。今まで準備してきたことをしっかり発表できるか緊張と不安がすごかったが、子どもたちもたくさん反応してくれて、学生もすごく楽しんでいて、すごくいい思い出になった。保育者が子どもたちが楽しめるように環境づくりをしっかり行うことはとても大切なことなので、今回の活動を今後活かしていきたいと思った。

#### 【田中愛梨】

おじいちゃんが登場したところから子どもたちは盛り上がっていて質問にもしっかり回答してくれていた。でも、回答は想像以外のものもたくさんあって子どもたちの発想は無限だなと思った。それにあわせて、学生も対応できた。最初はとてもうまくいか不安だったが、最終的にはうまく行ってよかった。練習と本番ではハプニングもあって練習通りにならなかったこともあったけどみんなで協力して乗り越えてよかった。子どもたちは常に興味津々ですごく自分たちも劇をしていて楽しかった。かぶの動画では「カブから電話かかってきたよー」と子どもが言っていてそういう発想も子どもにはあるのだなと改めてすごいなと思った。子どもたちが大きな声で言ってくれたり、質問に答えてくれたりして子どもたちってとてもすごいなと思った。私たちが、大きなカブをして最初は子どもたちが楽しめるのかとか上手くいくのかとか考えていたけど練習をするにつれてどんどんできてきてよかったし、楽しめてよかったと思った。カブがどんな感じででてくるかいろんなイメージがあっただけど本番でやった奈落から出てくるあれで正解だったとおもう。客席からみたら次々に人が出てくるのが驚きだったらしく前にレンガをおいてたからもっとそう見えてよかった。

#### 【高巢真希】

子どもたちが物語の世界に積極的に参加できる工夫が盛り込まれており、とても楽しい実践だった。大小異なるかぶを抜く過程で、子どもたちが自然に物語の進行に興味を持ち、一緒に楽しめる場面が多かったのが印象的だった。特に、一番大きなかぶを抜く場面で子どもたちが「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声に合わせて体全体を動かす姿は、劇の一員としての達成感を共有する貴重な体験だったと思う。また、役者の動きや表情がとても工夫されており、子どもたちが動きを真似しやすかった点も良かったです。動物たちの特徴を体で表現する動きや、誇張された引っ張る仕草は、子どもたちを引き込む力が強く、劇に集中させる効果があった。さらに、観客席の子どもたちを巻き込むことで、単なる観劇ではなく、参加型の楽しい場を作ることができていたと感じた。このように子どもたちが身体を使って物語を体験し、表現力や想像力を育む良い機会であると感じた。今回の実践を通じて、動きや身体表現の重要性を改めて実感するとともに、子どもたちが自ら主体的に関われる工夫の大切さを学んだ。